

神の前に聖く生きる

コリントの教会は大都会の教会によくみられるように、賜物に恵まれた教会であったが、同時に色々な問題を抱えた教会でもあった。第1に使徒パウロが取り扱った問題は教会内の分派争いであったが、それと共に教会で起こったもう一つの大きな問題は、当時の異邦人の世界ですら鬻ぎ(ひんしゆく)を買うような不道德の問題であった(1～2節)。パウロは大きな驚きと悲しみをもって、強い語調で彼らの過ちを指摘し、教会が「神の教会」としてこの問題に正しく対処するよう勧告する。いわゆる「教会の戒規」と呼ばれるものである。

何のためにそのような戒規を執行するのか？パウロは(4～8節)で戒規の目的を二つ挙げる。第1は、教会戒規の目的は、裁きのための裁きではなく、究極的にはその罪を犯した人が悔い改めて神に立ち帰り救われる為であること。この点は前回すでに学んだ。第2は、教会全体の純潔の保持と神への真実な礼拝の確保のためである。もっと簡単にいえば、教会(私たち一人ひとり)が神の前に聖く生きる者となるためである。

パウロはここで「パン種の譬」を用いて、教会の純潔を守るべきことを教える。パン種というのはパンを焼くときに使うふくらし粉のことである。ふくらし粉を少し入れるだけで、粉のかたまり全体がふくらむ。それは聖書では「罪と汚れ」の象徴である。罪は放っておくと全体に影響を与え全体を腐敗させる。コリントの教会がそのような危険に直面していた。

教会の中で、不品行や悪徳を少しでも不問にふすならば、それは教会全体に大きな影響を及ぼし、教会全体を腐敗させてしまう。だから、この不道德な性的腐敗をいうパン種を取り除いてしまいなさい、神の前に「新しい粉のかたまり」、つまり「純粋な神の教会」となるために、この古い罪のパン種を取り除きなさい、とパウロはいうのである。

パウロのこの「パン種」のイメージを理解するためには、旧約時代の「過越祭」を思い出す必要がある。「出エジプト」という神の「贖いと救いの出来事」を記念するために盛大な祭が行われてきた。これが「過越祭」であるが、その祭になると、身代わりの小羊がささげられ、肉が裂かれ血が流されて、その血は神殿の奥にある聖所に注がれた。それと同時にその日から七日間、「種入れぬパンの祭」が続く。その祭になると、家の隅々まで掃除し、家の中から罪の象徴であるパン種を一掃する。そして、種入れぬパンを焼いて神にささげて聖なる神に聖なる礼拝をささげた。

この祭は、やがて来たるべきメシアによる罪の贖いを差し示していた。そしてその通りに約束のメシア(＝キリスト)がお出でになられ、世の罪を取り除く神の小羊として十字架の上で罪の贖いを成し遂げて下さった。それによって、私たちの罪はあがなわれ、神に受け入れられる者となった。

私たちはキリストの十字架の贖いによって罪を清められて、神の民とされた！だから、私たちは「神の民／教会」として、神の前に自らを聖めていかねばならない、この体も、生活も、教会も神の前に聖くあるように、生きようではないか！と言うのである。

こうして、不品行事件を契機に、使徒パウロはコリントの信徒たちに「教会戒規」の大切さと必要性を教え、また神の民として聖なる神の御前に聖く生きることの大切さを教えるのである。